

Doc 219H - P1

千九百三十七年十月六日國際聯盟總會ニ依リ
採擇サレタル第一回報告書

小委員會ハ極東ニ於ケル戰國ノ歴史的巨ツ根本ノ
諸原因ヲ取扱フコトシテオラナイ。例ヘバ千九百三
十三年二月二十四日開信ノ總會ニ依リ採擇サレタル
報告書中ニ取扱ハレ居ル滿洲事變ニ遍及スル必要ア
リト考ヘテイナイ。我ハ又軍事行動ノ範圍若クハ交
渉、政策ノ範圍ニ於ケル事件ノ進展ヲ詳述シヤウト
シテオラナイ。是等ニ關シテ方面ノ發表シタ報告ハ
相矛盾シ、入手シ得ル資料ニ基キ得テ千九百三十五
年三月二十八日以來最早聯盟加盟國デナイ日本ガ委
員會ニ出席ノ代表ヲ送ルコトヲ承知シナカツタ事實
ニ鑑ミ、コレガ詳述ハ不可能デアラウ。

何レノ場合ニモ、詳細ナル研究ハ不要デアル。千
九百三十七年七月初ニハ、何レノ側カラ見テモ、ソ
ノ關係ニ於テ平和的ニ解決出來ナイ様ナモノガアル
ヤウナ徴候ハ見エナカツタ。委員會ガナサネバナラ
ヌコトノ全部ハ平和關係ノ狀態カラ大軍ガ戦國ヲ行
フ局面ニ至ラシメタル諸事件ヲ記述シ算定スルニア
ル。從ツテ委員會ハ一諸事件ノ主ナル發展ヲ追究ス
ル適當ナル時期ニ於テ一戰國ニ對スル當事國ノ條約
上ノ義務ヲ檢討シ、本報告書ノ最後ニ述べラレル結
論ヲ得ルコトハ可能デアル。

Doc 2194 - P2

千九百三十七年七月ノ初ニハ、北支ニハ約七千ノ日本兵ガキタ。是等ノ部隊ハ支那ト北京ニ公使館ヲ有スル列強トノ間ニ締結サレタル千九百〇一年九月七日ノ議定書（並ニソノ添附書）ニ基キソコニ駐屯シタ。是等ノ協定ノ下ニ支那ハ北京ノ公使館區域ニ恒久的警備ヲ維持シ、又北京ト海上トノ交通ヲ確保スル爲十二指定地點ヲ占領スル各國ノ權利ヲ認メタ。尙千九百二年七月十五日―十八日締結ノ追加協定ノ條件下ニ上記諸地點ニ駐屯セル外國部隊ハ「戰火ヲ交ユル」場合ヲ除イテ、支那當局ニ通告スルコトナク、野外演習、射撃訓練等ヲ行フ權利ガアツタ。

現在北京及ビ一九〇一年九月七日付協定ニテ特記サレタル地點ニ駐屯軍ヲ有シ居ル日本以外ノ列強ハ極少數ノ派遣隊ヲ有シテキルニ過ギナイ。本年七月初ニ北支ニ駐屯シテ居タ英國兵ノ數ハ一〇〇七人デアツタ。本數字ハ公使館護衛兵二五二人ヲ含ム。同様ニ佛蘭西ガ河北ニ有シテ居タ實兵力ハ一七〇〇人カラ一九〇〇人ノ間デ其主力ハ天津ニ居ル。其餘ハ山海關、秦皇島、沽、及北京ノ守備隊ニ分布サレ、北京ノ場合ハ大使館護衛隊ヲ組織シテ居ル。現在之等軍隊ノ全兵力ハ兵一、六〇〇人、騎兵六〇人デ内大使館護衛兵ハ一二〇人デアル。

滿洲及熱河ニ於ケル事件及新事實ニ加フルニ北支ニ於ケル日本ノ政治的活動、他國ノ派遣隊ヲ逐カニ變傷スル日本有敎兵員ノ駐屯、而シテ屢行ハル日本軍ノ練兵ヤ演習ハ支那人ヲ動搖サセタ。去ル七月七日緊張シタ緊國氣ノ中デ事件ガ發生シタ。本事件ハ之ニ先ンシテ起キタコレ迄ノ諸事件ト本質的ニハ何等異ツタモノデハナカツタガ、北支ニ於ケル日本軍ノ現在ノ作戦行動發生ノ誘因トナツタノデアツタ。事變ノ端緒ハ北平（北京）ノ南西十三軒米ノ地點ニアル直隸橋ニ於テ其地方デ夜間演習ヲ行ツテ居タ日本軍ト支那守備軍トノ間ニ起ツタ。

支那側及日本側ノ本事件ノ説明ハ相違シテ居ル。

日本側ノ説明ニ依レバ、發砲ヲ開始シタノハ支那第二十九軍ノ兵デアツタ。七月八日ノ朝日本軍當局ノ間ニ假停戦ガ取極メラレター之ハ此事件解決ノ爲ニ兩當局ノ間ニ直チニ交渉ヲ開始スル途ヲ開イタ筈デアル。然シ支那軍ハコノ協定ヲ守ラズ、又其翌日成立シタ日支兩軍相互撤退協定ヲモ守ラナカツタ。コノ支那軍ノ攻勢的態度ノ爲ニ七月十一日ニ一方日本軍當局ト他方天津市長及河北省公安局長トノ間ニ締結サレタ事變處理協定モ無用トナツタ。

支那側ノ説明ニ據レバ、七月七日夜演習ヲシテ居

滿洲及熱河ニ於ケル事件及新事實ニ加フルニ北支ニ於ケル日本ノ政治的活動、他國ノ派遣隊ヲ逐カニ凌駕スル日本有欲兵員ノ駐屯、而シテ履行ハル日本軍ノ練兵ヤ演習ハ支那人ヲ動搖サセタ。去ル七月七日緊張シタ緊國氣ノ中デ事件ガ發生シタ。本事件ハ之ニ先ンシテ起キタコレ迄ノ諸事件ト本質的ニハ何等異ツタモノデハナカツタガ、北支ニ於ケル日本軍ノ現在ノ作戰行動發生ノ誘因トナツタノデアツタ。事變ノ端緒ハ北平（北京）ノ南西十三軒米ノ地點ニアル蘆溝橋ニ於テ其地方デ夜間演習ヲ行ツテ居タ日本軍ト支那守備軍トノ間ニ起ツタ。

支那側及日本側ノ本事件ノ説明ハ相違シテ居ル。

日本側ノ説明ニ依レバ、發砲ヲ開始シタノハ支那第二十九軍ノ兵デアツタ。七月八日ノ朝日本軍當局ノ間ニ假停戰ガ取極メラレター之ハ此事件解決ノ爲ニ兩當局ノ間ニ直チニ交渉ヲ開始スル途ヲ開イタ筈デアル。然シ支那軍ハコノ協定ヲ守ラズ、又其翌日成立シタ日支兩軍相互撤退協定ヲモ守ラナカツタ。コノ支那軍ノ攻勢的態度ノ爲ニ七月十一日ニ一方日本軍當局ト他方天津市長及河北省公安署長トノ間ニ締結サレタ事變處理協定モ無用トナツタ。

支那側ノ説明ニ據レバ、七月七日夜演習ヲシテ居

Doc 219 H - P 4

ツタ日本軍隊が一人ノ兵が見エナクナツタト云フ口
實チ、調査ヲスル爲直溝橋ニ入ル許可ヲ求メタトコロ、
此レヲ拒絕セラレタノデ日本軍ノ歩兵ト砲兵ニヨリ
直溝橋ガ攻撃セラレ、支那守備隊ガ此レニ應戰シタ
情勢ガ惡化シタノハ、日本軍ガ撤退ヲ開始スルヨリ
前ニサヘ、撤兵ノ協定ヲ應諾シタ支那軍ノ行動ニヨ
ツテデハナク、大増援部隊ヲ得テ直溝橋地帯ニ於ケ
ル攻勢ヲ再開シ、彼等ノ作戦ヲ北京近郊ニ迄擴大シ
タ日本軍ノ行動ニヨルモノデアツタ。支那政府ハ七
月十一日支那中央政府ト日本軍トノ間ニ締結セラレ
タ協定ノ條件ニ何等異議ヲ唱ヘナカツタガ、日本ハ
此協定ノ追加的處置ヲ強制シ様トシタ。加フルニ軍
隊ノ相互撤退ノタメニ締結シタ協定ヲ無視シ、日本
軍隊ハ北支ニ於ケルソノ作戦ヲ擴大シタ。

ソレラノ事件ニ關スル此等ノ支那側及ビ日本側ノ
説明ニ明瞭ナル矛盾ハ僅ク覺キ、局地解決ノタメ現
地當局者間ニ此等交渉ガ進メラレテホル時、又日本
政府ハ地方的解決トスルコトガ北支ニ於ケル其勢力
ヲ確認スル局地的解決ヲ南京ヲ除イテ圖ルベキデア
ルト主張シ、日本政府ト支那政府トノ間ニ表面ノ交
換が行ハレテ居ル時、部隊ノ大規模移動ガ情勢ヲ益
々惡化シテ居ツタ。急速ニ増強ヨリ派遣セラレタ増
援部隊ノ天津及ビ北平郊外到着ノ結果、七月十二日

Doc 2194-P5

現在ノ日本ノ有効部隊ハ支那側ノ報告ニヨレバ二万名ヲ超過シ其空軍ハ飛行機百機ヨリ應ツテ居タ、又中央支那政府ノ軍隊ハ北上シテ居ツタト発表サレタ。

日本政府ハ七月七日ノ事告解決ニ干渉セザル様ニト南京ニ通達セルガ如ク、支那軍ノ北上ニ對シテ同政府ヘ警告ヲ發シタ、千九百三十三年（昭和八年）五月三十一日ノ沽休戰會議及ビ千九百三十五年（昭和十年）六月十日ノ梅津何應欽協定（支那側ノ論駁スル協定デアル）ニ據リ日本ハ支那兵ノ河北派遣ニヨリ生起スル重大ナル結果ニツキ南京政府ヘ警告ヲ發シタ。

七月末、北支ニ於テ、地方的交渉が進行シツツアツタ時ニ突如トシテ戰鬪行爲ガ勃發シタ。日本軍ハ北平天津ヲ占領シ、右兩都市ト中支トラ結ブ南方向ケ鐵道ヲ奪取シタ。日本勢力ニ好意ヲ有スル一新政府ガ、河北ニ樹立サレタ。

日本軍ハ、ソレカラ、張家口、大同ヲ經由シ北平ト、綏遠トヲ結ブ鐵道沿線ヲ西方ニ向ツテ進ンダ。尙又、河北ト察哈爾トノ國境ニ沿ツテ進ンダ、北平ノ西北約八十軒ノ南口峠ノ隘路ニヨツテ、日精銳諸師團ノ内蒙古ニ突入ヲ容易ナラシメタ。

北支ニ於ケル日本軍ノ作戦ハ、支那テ座シテ反動ヲ誘發シタ。支那ハ頻ク讓歩スベシトノ日本政治家

Doc 2194-H-P6

ノ諸宣言、東京デ實施サレタ非常時財政施策、在支日本人ノ引揚等ニヨツテ、支那ノ官民ハ何レモ、日本ハ兵力ヲ以テ支那ノ抵抗ヲ擊破スル決意ナリトノ結論ニ達スルニ至ツタ。

此ノ列國ハ、八月第二通目ノ末頃、支那側デハ斯カル戰鬪行爲ガ、支那及ビ他國ノ權益ガ復雜錯綜セル上海デ行ハレルコトヲ極力回避セントノアラユル努力ヲセルニ拘ラズ上海地區ガ第二ノ作戰地域トナツタ時、愈々確觀サレルコト、ナツタ。

昭和七年（千九百三十二年）五月五日協定締結ニヨリ、上海ノ紛争ハ終局ヲ告ゲタ、該協定第二條ニハ、該協定ニ據リ處理サルル地域内ニ於ケル正常狀態ノ再建ニ關シ後日之ガ取極メヲ見ル迄ハ、支那軍ハ協定締結當時其占領セル位置ニ停止スベシト規定サレテ居ル。上海會議ノ支那側代表者ハ、此協定受諾ニ際シ、該協定ハ支那領土内ノ支那軍ノ行動ニ對シ何等永久の拘束ヲ含マザルモノト諒解スル旨特ニ言明シタ。

日本國外務大臣ハ、昭和十二年（千九百三十七年）九月五日帝國議會ニ於ケル演說デ、八月九日ノ上海ニ於ケル最初ノ事件並ニ後日起ツタ紛争ニ就テ次ノ通り述ベテ居ル。

「九月九日上海ニ於テ陸軍除ノ大山少尉、齋藤水

Doc 2194-P7

兵ノ兩名ガ支那ノ保安隊ノ手デ殺害サレタ

「當時ニ於テサヘ尙ホ日本側ハ寧ラ平和主義ニ則リ、支那側ヲシテ保安隊ノ撤退並ニ昭和七年（千九百三十二年）ノ休戰協定ニ違反シテ建設サレタ一切ノ軍需工場ノ撤去ヲナサシメルコトニヨツテ該事變ノ解決ヲ計ラントシタ、然ルニ支那側ハ兎ヤ角言ヲ左右ニシテ、我方ノ要求ニ應ズルコトヲ肯ンゼズ、反對ニ其ノ兵力並ニ禁止地帯ニ於ケル軍需工場ヲ増強シ、遂ニ邦人ニ對シ不當ナ攻撃ヲ開始シタ」

「カクテ、我が政府ハ、當然ノ義務上、上海在留邦人保護ノ非常手段トシテ、海軍ノ小増援隊ヲ上海ニ派遣シタ。」

廣田氏ハ上海ヲ交戦區域カラ除外セントスル各國ノ努力ニ就テ述ベタ後「八月十三日午后、上海地區ニ増強サレツツアツタ支那軍ハ攻勢ニ出デタ」ト言ツタ。

コノ説明ハ八月三十日國際聯盟ニ通達サレタ中華民國政府ノ聲明中ノ説明ト對照ヲナシテキル。

八月九日ノ事件ハ左ノ如ク述ベラレテキル。

「日本海軍々人ガ支那側ノ警告ヲ無視シテ、上海近郊ノ支那陸軍飛行場ニ接近セントシタ爲惹起セル

Doc 219H-P8

衝突ニ於テ日本海軍士官一名、日本海軍水兵一名及び多數ノ支那保安隊員ガ殺傷サレタ。」

更ニ一九三二年（昭和七年）五月五日ノ協約締結ノ際ニ中華民國代表ノテシタル上通ノ聲明ヲ想起シ、中華民國代表ハ一方支那政府ガ上海地方官憲ニ對シ如何ナル不幸ナル事件モ發生セヌ様時ニ注意スルヤウ再三命令シタコトヲ述ベ、支那領土内ニ於ケル支那軍ノ行動ハ協定違反ナリト思考サレ得ルモノニ非ズト主張シタ。

支那側ノ覺悟ニ依レバ上海事變ノ善端ハ次ノ如ク述べラレテキル。

「四十八時間内ニ日本ハ上海ニ三十隻ノ軍艦ヲ集結シ、數千ノ兵力ヲ増強シタ。併シ年ヲ同時ニ、中華民國ノ防禦ヲ除去シ脅カニ破壊スルタメニ突出シタ諸要求ヲ中華民國當局ニテシ來ツタ。預期セラレタ攻撃ハ事件四日後ノ八月十三日ニ開始サレタ。」

ソレ以來、激烈ナル戰鬪ガ上海周邊ニ進行サレテキル。七月上旬ニ於ケル國際租界内及び特別租界道路上ニ陸屯セル日本軍隊ノ兵力ハ四千入デアツタ。九月末ニハ吳淞ニ集結シタ三千八百隻ノ日本軍艦ノ援護下ニ、支那當局ノ策定サレ、下江ニ入ルノボル増援軍ガ上陸シタ。

最近四週間ニ、日本ハ日本飛行機ガ就中中華民國

Doc 219H-P9

主都ヲ爆撃シタ揚子江流域ノミデナク、中華民國沿岸及ビ奥地ニ向ツテ軍事行動ヲ擴大シ、附地ニ夥シイ空爆が行ハレタ。

北支及中支ニ於ケル日本陸軍ノ軍事行動及日本航空機ニ依ル港都及支那内地ノ都市ニ對スル空襲トハ別ニ現在日本陸軍ハ陸軍トノ協力を恃ニ上海正面ニ於テ總ケル一方支那ニ依ル支那ヘノ輸送ノ供給ヲ阻止スル爲ニ沿岸ノ空ヲ行ヒツツアル一支部ノ數隻ハ撃沈サレタ。

七月七日以來漸次増大スル抵抗ニ直面シテ日本ハ其行動ヲ強化スルコトヲ止メズ兵力ヲ益々増加シ益々強力ナル武器ヲ使用シタ。支那ノ見解ニヨレバ上海地域ニ於ケル十万人ノ府卒ノ外ニ支那デ行動シツツアル日本ノ軍隊ノ勢力ハ二十五万人ヲ總エテ居ル。

日本航空機ノ活躍ニ應ジテハ顧問委員會ハ九月二十七日ノ決議ニ於テ支那ニ於ケル開放都市ニ對スル空爆ヲ批准シタ。總會モ亦此決議ヲ賛成シマシタ。

二

現在ノ状態ニ懸念シタ附主國ヲ危險スルガ爲ニ支那ニ於ケル商業事業及日本國民ノ支那ニ於ケル治外法權狀態ノ如キ事項ヲ規定スル條約ヲ締結スル事ハ必要トハ思ハレナイ。吾々ノ現在ノ目的ニ關聯ア

Doc 219 H-P 10

ル只三ツノ主要ナル條約ガアルー即一九〇一年（明治三十四年）九月七日ノ長條議定書、一九二二年（大正十一年）華盛頓ニ於テ調印サレタ九ヶ國條約及一九二八年（昭和三年）ノ巴里協約デアリ之ニ少シ性質ヲ異ニシテ居ルガ一九〇七年（明治四十年）十月十八日海軍條約第一號ガ追加サレテヨイデアラウ。之等ノ外ニ日華當局間ニ種々ナル場合ニ局地的ニ協議サレタル不確定ノ双務的協定ガアル。其ノ明確ナル言葉、範圍、之等ノ協定ノ效力ニ付テノ解釋ハ自今ノ道トナツテ居リマス。之等ノ協定ハ、上記三ノ多數國ニヨル協定中ノ台事口ノイヅレカニ依リ負擔サレル義務ニモ影響ヲ及ボシ又ハ之ヲ蹂躪スルコトハ出来ナイ。

千九百一年（明治三十四年）九月七日ノ議定書及ビ當時文書ニ依リ、日本ハ該ル領ノ口々ト衆ニ北平ニ於ケル公使館ト海トノ間ノ一般ニ公開サレタル通信ヲ保持スルガ爲ニ北平奉天鐵道ニ沿ヒ河北省ノ所定ノ地點ニ軍用ラ座屯セシメ得ルコトニナツテ居リマス。之等ノ軍用ハ、一支隊官署ニ通知スルコトナク野外演習ヤ射撃演習等ヲ行フ權利ガアルコトニナツテ居リマス、尤モ負傷ノ場合ハ此ノ限デハアリマセン。一

Doc 219 H-P 11

千九百三十二年（大正二十一年）ノ支那ニ關シ
タ事項ヲ條約國ガ遵守スベキ原則及政策ヲ定メタ
ルニケル條約ニ依リ支那ヲ除ク條約國ノ中ニ支那
ノ主權、獨立及領土行政上ノ保全ヲ尊重シ且ツ支
那ノ爲ニ強方且安固ナル政府ヲ發展維持スル爲メ
ニ充分ナル且設備機ヲキ適合ラ支那ニ供與スルコ
トヲ決定シマシタ。條約國（支那ヲ含ム）ノ間ニ
條約國ノ何レカノ一國、他國ヲ不條約ノ事項ノ適
用ヲ伴ヒ且新ル適用ノ可成ラ自由スルコトヲ希望
セラル、ガ如キ狀勢が発生シタ時ニハ國聯條約國
間ニハ充分ニ且調ラ機ナル組織ヲスベキコトニ約
定サレマシタ

千九百二十八年（昭和三年）ノ巴黎條約ヲ各
當事國ハ各條約國ノ國民ノ名ニ簽下應旨ニ次ノ如
ク聲明シマシタ即チ各條約國ハ國家間ノ紛争ノ
解決ヲ戰爭ニ訴ヘルコトヲ非トシ且國際法規則、
正義ニ於ケル國家ノ一手段トシテノ戰爭ヲ放棄ス
ルト。條約國ノ間ニ紛争ノ因ニ發生シタ如何ナル
性質ノ及如何ナル原因ノモノデアル紛争ヲ條約國
ノ處理解決ニハ平和的方法以外ノ方法ヲ余ム可ラ
ザルコトヲモ決定シマシタ

Doc 219H-P12

三

一見シテ此ノ報告ノ最初ノ部分ニ管カレテアル
臺灣件ハ、之等條約ニ基ク日本ノ中華民國及ビ
他ノ諸國ニ對スル義務ノ違反ヲ構成シテキル。
既述ノ情況ノ下ニ有ツテ、全中華民國ニ亘ル陸
海、空ヨリスル日本軍ノ敵對行動ハ一見シテ中
華民國ノ主權、獨立並ニ領土ノ保全ヲ尊重スベ
キ義務及ビ又如何ナル原因及ビ性質ノモノモ中
華民國トノ紛争ハノ解決ハ平和的手段ニ依リテ
ノミ求ムベシトノ義務ト相容レザルモノデアル。
若シ其レガ自己防衛（合法的支那領土ニ在ル日
本軍及ビ日本人ノ防衛ヲ含ム）ニ必要ナル手段
デアル事が明示デキタナラ日本軍ノ支那ニ於ケ
ル地位ハ日本ノ條約義務ト調和セシメラレ得タ
被ニ思ハレル。本問題ガ裁決サレル要素ノ中ニ
ハ現在迄ニ到ル紛争發展經過中ノ當裏國ノ態度
及ビ政策ニ關シテ當裏國自身ニ依リ爲サレタ聲
明ヲ包含セネバナラス。
支那ノ態度ハ行政部委員長蔣介石元帥ノ千九百
三十七年七月十七日ノ演說中ニ示サレテキル。
其ノ中デ彼ハ次ノ事ヲ強調シタ。
國家存立ト國防的共存ハ中國國民政府對外政策
ノ一對ノ目的デアル……中國ハ戰爭ヲ求メテ
ハ居ナイ。中國ハ唯中國ノ存立ソノモノヲ脅ス

Dec 21/1911-714

國防法又ハ條約ニ認メラレタル如何ナル和平的方法譬ヘバ直接交渉。周居仲調停及ビ仲裁裁判ノ如キヲ受ケルベキ用意有ル事ヲ明確ニ述ベテ居ル。

日本政府ノ紛争ニ對スル一般的態度ハ七月廿七日、議會ニ於ル質問ニ答ヘテ首相ガナシタ聲明中ニ示サレテキル。

彼ハ言フ？

「日本ハ中國ニ於ケル如何ナル領土的野心モナイ。若シ日本ガ中國ノ様スル如キ計畫ヲ有スルナラバトシタラ、日本軍ハ既ニ全北支ヲ占領シテキルカモ知レナイ。中國政府及ビ列強ハ必ズコレヲ明ラカニ認メテキル。日本ハ中國ノ協力ヲ求メテキルノデアリ、支那ノ領土ヲ求メテキルノデハナイ。協力ト云フ事ニ依リ私ハ中國ノ利益ガ日本ノ利益ニ從屬セシメラルル事ヲ意味スルノデハ無ク。二國ガ平等ナル相互援助ノ基礎ノ上ニ極東ノ文化及ビ繁榮ノ發展ニ盡クスベキ事ヲ意味スルノデアルト。

Doc 219 H-P 15

日本一九三一—一九四一

第一卷

外務大臣廣田氏ハ九月五日議會ニ於ケル演說ニ於テ日本政府ノ方針ハ局部的解決並ニ不擴大方針デアル事及ビ日本政府ハ急速ナル解決ニ凡ユル努力ヲ爲シ來リタルコトヲ宣言シタ。

九月十五日同外務省スポークスマン局部的解決不擴大方針ニ基キ日本政府ハ速急ナル解決ニ到達スル爲メニ有ユル事ヲ爲シタト宣言シタ。

如斯聲明ハ事件ノ初期ニ於テハ兩當事側共ニ局地的ニ局限サレ得且平和的解決ガ見出サレ得ルト信ジテキタ事ヲ示スモノ、如クデアル。然シ斯カル結果ハ得ラレナカツタ。

日本政府ノ公式聲明ガ日本政府ノ和平意圖ヲ水泡ニ爲セシメタルハ中國軍ノ行動ト中國政府ノ侵略的意圖ナリト宣言スルハ注目ニ價ヒスル。

一方中國政府ノ公式聲明ハ全然同一ノ攻撃ヲ日本ニ對シテナシテキル、即チ日本軍ノ侵入ト日本政府ノ侵略的意圖ガ局部的事件ヲ大慘劇ニ擴大セシメタノデアルト。

比較的初期ニ於テ日本政府ハ單ニ此事實ヲ局地的解決スルノミナラズ更ニ日支間ニ存在シタ有ユル問題ノ解決ヲ得ント決意セシモノ如ク見エタ。

Doc 219 H. P 16

七月十一日夕刻外務省ハ同日午前中閣議ニ於テ決定サレタル聲明ヲ發表シタ。

右聲明ノ趣意ハ日本ハ北支ニ於ケル平和並ニ秩序ノ維持ヲ熱望スルモ日本政府ハ右地方兵力ヲ急派スル爲メ凡ユル必要ナル方法ヲ採ル意圖ナリト云フ事デアツタ

七月二十七日近衛公ハ左ノ如キ聲明ヲ含ム演說ヲ行ツタ。

「對支問題ヲ局部的ニ解決スルノミナラズ吾々ト更ラニ一步進ノデ日支關係ノ根本的解決ニ到達スベキダト思フ」

九月五日廣田氏ハ議會ニ於テ述ベテ曰ク

「日本政府ノ根本的政策ガ滿支ノ共存共榮ノ爲メニ之等三國ノ關係ノ鞏固化ヲ目的トスルノデアルコトハ今更議論ヲ要セナイ 吾々ノ此ノ眞意ヲ無視シ中國ガ我々ニ續シテ大電ヲ動員シタ以上、吾々モ武力ノ動員ヲ以テ之ニ對峙スル以外ニ方法ハナイ、中國ノ如キ國ニ其誤謬ヲ反省スルカモ知レヌ様ニ決定的打撃ヲ與フベク我國ガ決意ヲ爲シタルハ自行權ト大義ニ從フモノデアルト確信ス。日本帝國ノ採ルベキ途ハ支那電ヲ擊破シ以テ完全ニ戰意ヲ失ハラシムニ在ル」

支那領ハ七月三十日蔣介石ニ依リ左ノ如キ聲明ヲ發表シタ。

Doc 219 H. P 16

七月十一日夕刻外務省ハ同日午前中間議ニ於テ決定サレタル聲明ヲ發表シタ。

右聲明ノ趣意ハ日本ハ北支ニ於ケル平和並ニ秩序ノ維持ヲ熟望スルモ日本政府ハ右地方兵力ヲ急派スル爲メ凡ユル必要ナル方法ヲ採ル意圖ナリト云フ事デアツタ

七月二十七日近衛公ハ左ノ如キ聲明ヲ含ム演說ヲ行ツタ。

「對支問題ヲ局地的ニ解決スルノミナラズ吾々ト更ラニ一步進ノデ日支關係ノ根本的解決ニ到達スベキダト思フ」

九月五日廣田氏ハ議會ニ於テ述ベテ曰ク「日本政府ノ根本的政策ガ滿支ノ共存共榮ノ爲メニ之等三國ノ關係ノ鞏固化ヲ目的トスルノデアルコトハ今更議論ヲ要セナイ 吾々ノ此ノ眞意ヲ無視シ中國ガ我々ニ續シテ大軍ヲ動員シタ以上、吾々モ武力ノ動員ヲ以テ之ニ對峙スル以外ニ方法ハナイ、中國ノ如キ國ニ其誤謬ヲ反省スルカモ知レヌ様ニ決定的打撃ヲ與フベク我國ガ決意ヲ爲シタルハ自行權ト大義ニ從フモノデアルト確信ス。日本帝國ノ採ルベキ途ハ支那軍ヲ擊破シ以テ完全ニ戰意ヲ失ハラシムニ在ル」支那側ハ七月三十日蔣介石ニ依リ左ノ如キ聲明ヲ發表シタ。

Doc 219 H-P 16

七月十一日夕刻外務省ハ同日午前中閣議ニ於テ決定サレタル聲明ヲ發表シタ。

右聲明ノ趣意ハ日本ハ北支ニ於ケル平和並ニ秩序ノ維持ヲ熟望スルモ日本政府ハ右地方兵力ヲ急派スル爲メ凡ユル必要ナル方法ヲ採ル意圖ナリト云フ事デアツタ

七月二十七日近衛公ハ左ノ如キ聲明ヲ含ム演説ヲ行ツタ。

「對支問題ヲ局部的ニ解決スルノミナラズ吾々ト更ラニ一步進ノデ日支關係ノ根本的解決ニ到達スベキダト思フ」

九月五日廣田氏ハ議會ニ於テ述ベテ曰ク

「日本政府ノ根本的政策ガ滿蒙ノ共存共榮ノ爲メニ之等三國ノ關係ノ鞏固化ヲ目的トスルノデアルコトハ今更議論ヲ要セナイ 吾々ノ此ノ眞意ヲ無視シ中國ガ我々ニ續シテ大軍ヲ動員シタ以上、吾々モ武力ノ動員ヲ以テ之ニ對峙スル以外ニ方法ハナイ、中國ノ如キ國ニ其誤謬ヲ反省スルカモ知レヌ様ニ決定的打撃ヲ與フベク我國ガ決意ヲ爲シタルハ自衛權ト大義ニ從フモノデアルト確信ス。日本帝國ノ採ルベキ途ハ支那軍ヲ擊破シ以テ完全ニ戰意ヲ失ハラシムニ在ル」

支那側ハ七月三十日蔣介石ニ依リ左ノ如キ聲明ヲ發表シタ。

Doc 219 H-P-17

「私ガ（キーリン）デ爲シタ聲明及蘆溝橋事件
解決ノ爲メニ私ガ提案シタ最少限度ノ四條件ニ
賛リハナイ。此ノ決定的事態ニ達シタカラニハ
吾々が北京及天津ノ狀勢ヲ地方的解決ノ問題デ
アルト猶考ヘル事ガ出来タト云フ事又ハ北部地
方ニ於ケル日本軍ノ隊ヤ同地ニ別ノ傀儡政府
ヲ日本軍ガ樹立スルコトガ許サレ得タデアラウ
ト云フコトハ問題ニナラヌノデアル。現在吾々
ニ與ヘラレテキル唯一ノ道ハ國民大衆ヲ唯一ノ
國民的計畫ノ下ニ最後迄固フ様ニ指導スルコト
デアル、ツマリ、日本ノ侵略ニ對抗スル政府ノ
政策ハ依然トシテ同一デアリ何等變更サレナイ。
其ノ政策ト云フノハ中國領土ノ保全ト政治的獨
立ヲ維持スルコトデアル」

日本政府ハ屢々日支間ノ平和的解決ト渾然タ
ル極力ニ對スル希望ヲ聲明シテ來タ。然シ乍ラ
日本政府ハ第三者ノ干涉無シニ、日支間ノミデ
此ノ結果ガ達成セラレナキニ至ナラヌト終始主
張シテ來タ。

故ニ政府ハ第三者ノ干涉ヲ許サズル爲メ和平
タル聲明ヲ流スベキト云、七月二十九日ノ豫
算委員會ニ於ケル提議ニ應ヘテ日支ノ外務大臣
ハ自分ハ干涉ヲ豫期シテキナイト、又若シソノ

Doc 219H-P18

様ナ申出ガアツタナラバ政府ハ之ヲ必ズ拒絶ス
ルト答辯ヲナシタ

更ニ諸問委員會ノ仕事ニ参加スル様ニトノ招請
ヲ請絶セル九月二十五日附電報ノ中デ廣田氏ハ
帝國政府ハ現在ノ事件ノ解決ニ關シ、屢次ノ聲
明ノ如ク、日支間ノ問題ノ正當、公平且ツ實際
的ナル解決ハ二國ニ依リ見出ス事ガ出來ル事ヲ
確信シテキルト言明シタ。

中國ノ態度ニ付テハ議會ト支那代表委員會ニ依
テ爲サレタ聲明ガ參照トナリ得ルダロウ。

七月十九日ノ覺書——ソレハ既ニ引用サレタノ
デアルガ——ガ中國政府ノ政策ヲ依然説明シテ
キルコトニ疑ヒヲ差シ挟ム余地ハナイ。

紛争ノ基礎ヲナセル根據ニ關シ、又敵對行爲ノ最初ノ勃發ヘ誘導セル事件ニ關シ、兩國ガ非常ニ異ツタ見解ヲ取ルハ明カデアル。

併シ有力ナル日本軍艦ガ中國領土ニ侵入シ、北京ヲモ含ム廣大ナル地域ヲ軍事的に支配シテ居リ、日本政府ガ海軍上ノ優勢ヲ操ツテ中國ノ船舶ニ對シテ中國沿岸ヲ封鎖セルコト、及ビ日本航空機ガ該國ノ廣イ地域ニ達ツテ各地ニ爆撃ヲナシツツアル事ハ拒否シ難イ。

提出サレタ事實ヲ検討シタ後、委員會ハ日本ニヨリ陸、海、空ヨリ中國ニ加ヘラレタ軍事行動ハ本國間ヲ惹起シタ事件トハ全然均衡ヲ失シテキテ、カカル行動ハ日本國政治家ガソノ政策ノ目的トシテ斷言シテキル二國系間ノ友好的協力ヲ増進助長スルコトハ到底出來ナイシ、ソレハ現存シテキル法的文書ヲ基礎トシテモ、又自衛權ニ依イテモイヅレモ正當デアリ得ナイシ、且マタソレハ、一九二二年（大正十一年）二月六日ノ九箇國條約及ビ一九二八年（昭和三年）八月二十七日ノ巴里協約ニ對スル日本ノ義務ニ違反スルモノデアルトノ見解ヲ取ラザルヲ得ナイノデアル。

一九三七年（昭和十二年）十月六日國際聯盟總會

Doc 219H-P20

ニ採用セラレタ第二報告

一、分科委員會が既ニ諮問委員會ニ提出シタ報告ニ於テ、中國ノ現状ノ事實及ビ日本ノ條約上ノ義務ガ検討サレタ。該報告ハ日本ノ採ツタ行動ハ日本ノ條約上ノ義務違反デアリ、正當化シ得ザルコトヲ説明シテナル。

二、國際法ガ諸政府間ノ行爲ノ實際的法則ナリトスル了解ノ樹立竝ニ組織アル國民相互間ノ交渉ニ於テ條約上ノ義務ノ尊重ノ保持ハ總テノ國家ニ取ツテ重大關心事ナノデアル。

三、中國ニ於ケル現在ノ狀態ハ、紛争中ノ二國家ノミナラス、總テノ國家ニ取リテ、多少ノ差ハアレ、關心事ナノデアル。多クノ國ハ既ニソノ國民ノ生命、及ビ物質的利害ニ直接影響ヲ蒙ツタ。併シコレヨリ更ニ重大ナノハ、總テノ國家ガ平和回復ト維持ニ對シテ有スベキ關心デアル。實ニコレコソ聯盟ガソノ爲ニ存在シテ中ル根本目約デアル。カカルガ故ニ聯盟ハ規約ト條約ノ現存義務ニ從ヒ、極東ニ於ケル平和ヲ速ニ回復セント試ミル義務ノミナラス、權利ヲモ有スルモノデアル。

四、分科委員會ハ、カカル事情ノ下ニ於テ規約ガ聯盟加入國ニ課スル義務ヲ第一ニ考慮シタ。

「一九三七年（昭和十二年）十月五日ノ委員會ニ採用サレタ極東諮問委員會分科委員會第二報告」

Doc 219 H.P 21

本文ハ國際聯盟文書、一九三七年（昭和十二年）十月五日、ゼネバ、A、八〇、一九三八、七ヨリ再版サレタモノデアル。

五、諸國委員會ハ規約ノ第三條（三）ノ一般的約定ノ下ニ成立シタ、シカシテソノ事項ハ聯盟ノ活動範圍内ノ事項或ハ世界平和ニ關聯スル事柄ヲ總會ガソノ會議ニ於テ取扱フ權限ヲ與ヘテキル。

六、本條員ハ總會ノ活動ニ制限ヲ加ヘナイ
又特ニ中國ニ就リ訴ヘラレタ第二條（II）ハ「聯盟ハ諸國ノ平和ヲ擴張スルタメ貴明ニシテ效果的ニ思ハレルル如何ナル方策ヲモ取ルベシト規定シテキル。

七、如何ナル方策ガ「貴明ニシテ效果的」デアルカラ決定セントシテ分科委員會ハ事態ヲ考察シタ。

八、極東ニ於ケル現在ノ關係ハ日本ノ條約上ノ義務違反ヲ伴フガ本來日支政府間ノ直接方法ニ依ツテノミ解決出來ルモノデアルト云フ事ハ疑メ得ナイ。

反對ニ全情勢ハ最も深ク配慮サレネバナラナイ。
ソシテ聯約規約及ビ國際法ノ原則並ビ現存ノ諸條約ノ諸規定ニ從ヒ、平和ガ再ビ確立出來得ル適當ナル方法ガ特ニ考ヘラレナケレバナラナイ。

九、他ノ可能性ヲ吟味スル前ニ、コノ段階ノ軌程ニ於テサヘ了解ニ依ル平和復興ヲ確立スル爲ニ此レ以上ノ努力ガナサレネバナラヌト分科委員會ハ

Doc 219 H. P 22

確信シテキル。

十、現在ノ軋機ノ交渉ニ依ル解決ヲ試ミントスルニ當ツテ、聯盟ハ一方ノ當事國ハ聯盟加盟國ノデナク、諮問委員會ノ仕事ニ關聯シテ政治的問題ニ於テ聯盟トノ協カヲ明ラカニ心ヨシトシナイ事實ヲ見失フコトハ出來ナイ。

一一、「ワシントン」ニ於テ署名サレタ九ヶ國條約ノ下ニ、中國ヲ除ク他ノ締約國ハ中國ノ主權獨立及ビ領土並ニ行政的保全ヲ特ニ尊敬スル事ニ同意シ又中國ヲ含ム全締約國ハ條約條項ノ適用ヲ必要トシ又ハカクノ如キ適用ノ實議ヲ必要トスル事態ガ生ジタ時ハ何時デモ關係國內ニ充分ナ又率直ナ連絡ヲナスベキ事ニ同意シタト分科委員會ハ注意シタ。ソレ故、聯盟ノ名ニ於テ總會ガトルベキ最初ノ手段ハ九ヶ國條約ノ締約國デアアル聯盟加盟國ヲ初期ノ有效的ナ時期ニ上述ノ如キ協議ヲ開始出來ル緣ニ招待スル事デアルト分科委員會ニハ思ヘルノデアアル。此等加盟國ハ此ノ招待ニ效果ヲ與ヘル最善ナ又最も早イ手段ヲ決定スル爲速ニ會合スベキデアルト分科委員會ハ提案スル。

了解ニ依リ軋機ヲ終了スル方法ヲ求メル爲メ極東ニ於ケル特別權益ヲ持ツ他ノ諸國ト、關係諸國ガソノ仕事ニ共同出來得ルヤウトノ希望ヲ分科委員

Doc 2194. P23

會へ更ニ表示スル。

一二、新ク商議ニ參加シタ國々ハ如何ナル段階ニ於
テモ、諮問委員會ノ中介ニ依リ總會ニ對シ提議ヲ
スルコトガ望マシイト考ヘルデアラウ。分科委員
會ハ、總會ハ閉會スベキデハナク、其ノ様ナ提議
ニ際シテハ實現可能デアル最大限ノ協力ヲ考慮ス
ルト云フ聯盟ノ意向ヲ宣言ス可キデアルト勸告ス
ル。兎モ角諮問委員會ハ一ヶ月ノ期間内ニ（一）ジ
エネバーカ或ハ何處カ他所デ（二）更ニ會合ヲ開ク可
キデアル。

一三、提議サレタ方策ノ結果ガ列ル迄、諮問委員會
ハ中國ニ對スル精神的支援ヲ表明スル爲、又聯盟
ノ加盟國ハ中國ノ抗戰力ヲ弱メ新クテ今次ノ衝突
ニ於ケル中國ノ困難ヲ益ス如キ效果ヲ持度アル如
何ナル處置モ避クベキデアルコト

而シテ又如何ナル程度迄各國カ個々ニ中國ニ對ス
ル援助ヲ與フルコトガ出來ルカラ考慮スベキデア
ルコトラ勸告スルタメ諮問委員會ハ總會ヲ招集ス
可キデアル。